

宮城県文化財調査報告書第207集

上楯城跡

平成18年3月

宮城県教育委員会

上 檻 城 跡

序 文

新たな世紀を迎えるにあたり豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種開発事業も年を追うごとに増加しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、上楯城跡公園整備事業に先立って実施した上楯城跡の発掘調査報告書です。本書が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成18年3月

宮城県教育委員会

教育長 白 石 晃

例　　言

1. 本書は、平成17年度に宮城県大河原地方振興事務所との協議に基づき実施された、川崎町上橋城跡公園整備事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 本書の作成は、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、整理・執筆・編集は課員の協議を経て、佐藤貴志が行なった。
3. 本書における土色についての記述には「新版標準土色帳」（小山・竹原1973）を利用した。
4. 本書の第1図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図「陸前川崎」「村田」を複製して利用した。
5. 遺構略号は次の通りで、通し番号で各遺構に付した。

SB：門跡 SD：空堀跡 SF：土塁跡 SX：平場、土橋および溝状遺構

6. 調査の記録や整理に関する資料および出土品については、宮城県教育庁文化財保護課が一括して保管している。

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境.....	2
1. 上楯城跡の位置.....	2
2. 上楯城跡周辺の歴史的環境.....	2
3. 上楯城跡の現状と推定される城郭構造.....	2
4. 文献上の上楯城跡.....	4
第Ⅱ章 調査に至る経過と調査の方法.....	7
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物.....	8
1. 発見された遺構.....	8
2. 発見された遺物.....	17
第Ⅳ章 考察.....	18
第Ⅴ章 まとめ.....	20
参考・引用文献.....	20
写真図版.....	21

調 査 要 項

遺 跡 名：上楯城跡（宮城県遺跡記載番号：09058）

遺 跡 記 号：UY

所 在 地：宮城県柴田郡川崎町支倉字館山

調 査 原 因：上楯城跡公園整備計画

調 査 面 積：約385m²（調査対象面積：21,000m²）

調 査 期 間：平成17年4月18日～5月27日

調 査 主 体：宮城県教育委員会

調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 員：佐久間光平・菊地逸夫・佐藤貴志・白崎恵介・千葉直樹・村上裕次

調 査 協 力：宮城県大河原地方振興事務所 川崎町教育委員会

調査参加者：佐藤松寿・大内直美・宮崎ハル・佐藤きよみ・佐藤隆夫・佐藤玲子・佐藤 浩・
佐藤登美子・宮崎ハル子・真壁豊子



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	上桶城跡	城郭	中世	22	下知道跡	散布地	縄文早・中・古代
2	船山遺跡	散布地	縄文・古代	23	石道跡	散布地	縄文中～晩
3	西船跡	城郭	中世	24	小野原古跡	城郭	中世
4	上船跡	城郭	中世	25	天石田遺跡	散布地	縄文・古代
5	山崎城跡	散布地	縄文	26	四本桟道跡	散布地	不明
6	東城跡	城郭	中世	27	伊勢原遺跡	散布地	弥生
7	野中城跡	散布地	縄文中？	28	前川城跡	城郭	近世
8	木砂今遺跡	城郭	中世	29	羽根坂古道跡	散布地	縄文前～後
9	安達遺跡	散布地	縄文晚	30	中の内人道跡	集落	縄文中
10	黒森山遺跡	散布地	縄文	31	越川木賊跡	城郭	中世
11	丸森中古道跡	散布地	縄文晚・弥生・平安	32	本屋遺跡	集落・聚落	縄文中・後・中世
12	丸森古道跡	散布地	縄文	33	ガシヤノ遺跡	散布地	不明
13	丸森中古道跡	散布地	縄文末・晩	34	久保田遺跡	散布地	古代
14	丸森古道跡	散布地	縄文前・古代	35	小野城跡	城郭	中世
15	東原遺跡	散布地	平安	36	箕作遺跡	散布地	古代
16	中村山遺跡	集落	縄文早～晩・弥生	37	佐ノ船跡	城郭	中世
17	七曲山古道跡	散布地	縄文晚・晩・弥生	38	愛宕山道跡	散布地	古代
18	藤原道跡	散布地	縄文早・古代	39	下津道跡	集落	度支・奈良・空氣・奈良・平安
19	七曲山道跡	散布地	縄文	40	二本松道跡	集落	縄文早・弥生・古墳・平安
20	下石道跡	散布地	不明	41	河原田道跡	散布地	縄文早・晩・施・古代
21	神明道跡	散布地	縄文	42	下新田道跡	散布地	縄文・古墳
				43	下山道跡	古墳	古墳
				44	河原田古墳	円墳・方墳	古墳後
				45	中新田道跡	散布地	縄文・平安
				46	高野道跡	散布地	縄文前
				47	高野山崖道跡	崖	不明
				48	綱治谷山道跡	散布地	縄文早
				49	大針道跡	散布地	平安
				50	大向道跡	散布地	縄文中～施・弥生
				51	楓木古道跡	散布地	縄文
				52	楓木人道跡	散布地	縄文中・古代
				53	向庵道跡	集落	縄文後・平安
				54	高山西林道跡	散布地	縄文中・後・弥生
				55	音無日道跡	散布地	縄文・古代
				56	音無人道跡	散布地	縄文・古代
				57	八幡道跡	散布地	縄文・弥生・古代
				58	八幡古墳	円墳	古墳中
				59	元舟田道跡	河原田道跡	不明
				60	沼の古道跡	製鉄跡？	不明
				61	沼の植人道跡	製鉄跡？	不明

第1図 遺跡の位置と周辺の道跡

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

1. 上楯城跡の位置

上楯城跡は、柴田郡川崎町支倉字館山に所在する。本遺跡は、国営みちのく杜の湖畔公園から南東へ約3.5km離れた地点にある。

本遺跡が所在する柴田郡川崎町には、西側に歲王連峰があり、北側には青葉山丘陵、南側には高館丘陵がある。このうち南・北の丘陵は東側では釜房湖付近で狭くなり、丘陵で囲まれた内側は川崎盆地となっている。支倉地区付近は、丘陵内の狭長な盆地状の平坦地域と周囲の低い丘陵から成り、本遺跡は支倉川の北側にある南西から北東方向に細長く伸びた標高約260mの小丘陵上に立地している。この場所は、ちょうど県道暮石富岡線沿いの支倉小学校や支倉六右衛門常長の墓所と伝承される円福寺の裏手にあたり、本遺跡の南側に展開する集落は、近世における宿場町の名残から「宿」と呼ばれている。

2. 上楯城跡周辺の歴史的環境

川崎町内では、さまざまな時代の遺跡が約80ヶ所確認されている。そのほとんどが川崎盆地を東流する太郎川・北川・前川によって形成された段丘や台地上に立地している。このうち中世～近世の遺跡としては、11ヶ所の城館跡がある。これらは、本砂金・前川・小野・支倉地区に集中している。この中で、中世の城館跡は前川・本砂金川・支倉川流域の丘陵上に立地する。

前川城跡（28）は、川崎町の中心地である前川の北側に位置し、上楯城跡から西へ約7.5km離れたところにある。この場所は標高約200mの丘陵先端部で、現在川崎小学校が建ち、本丸は公園として整備されている。仙台藩の要害の一つとされ、一般には「川崎城」、「川崎要害」の名で知られる。築城は砂金11代右兵衛実常で、その時期は慶長13年（1608年）から同15年にかけてであったと言われている。実常は前川城の築城とともに川崎の町割を行なっており、現在残っている前川の町並みはこの頃に出来上がったものである。砂金氏は古くから川崎地方に居住していた豪族で、戦国時代頃から伊達氏の家臣となっており、この頃の拠点は前川城跡から南西に約1.7km離れた前川本城跡（31 別称：中の内城）にあったとされる。また、上楯城跡からみて北西に約9km離れた川崎町北端部には、砂金氏が前川本城に移り住む前の本砂金城跡（8）がある。

前川本城跡の北側には本屋敷遺跡（32）があり、東北横断自動車道の工事に先立って発掘調査が行なわれ、城下の町並みが確認された。

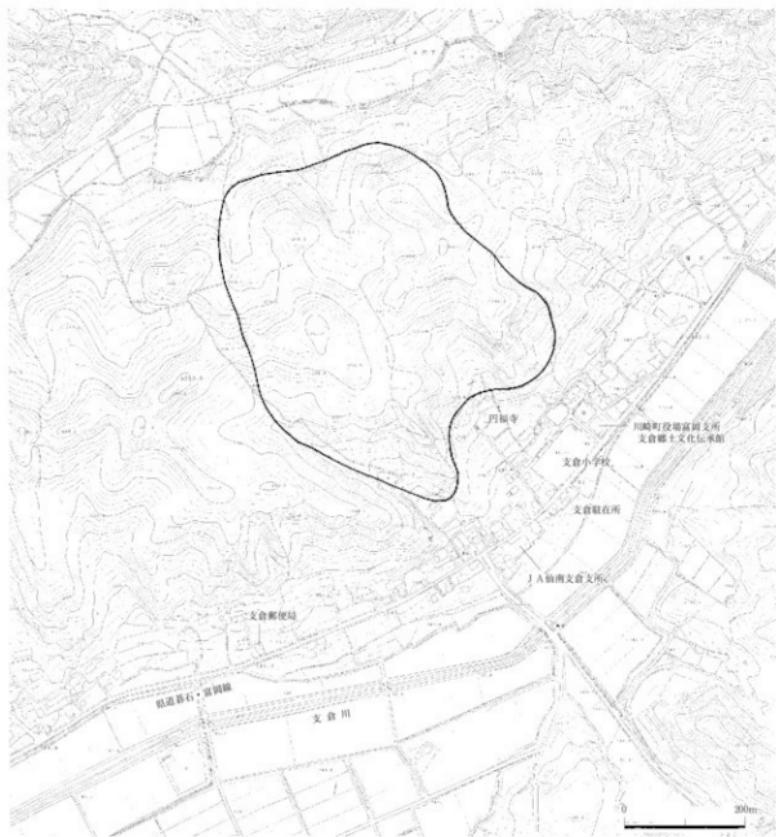
上楯城跡から北西に約4.5kmの丘陵上には、小野城跡（35）が立地する。城の地形が牛の躄った姿に似ていることから牛ヶ館とも呼ばれる。安倍貞任の臣某の城であったという伝承もあるが、戦国時代からは小野雅楽之充の居城であったことで知られる。

3. 上楯城跡の現状と推定される城郭構造

本遺跡は、丘陵の頂部と斜面を利用して構築された山城である。遺跡の範囲は東西・南北とも約

500mに及ぶものと考えられる。最も高い丘陵頂部の標高は約260mで、現在の集落との比高は約70mである。遺跡の現況は山林（杉林・竹林）や荒地となっており、点在する平坦な部分は最近まで畑として利用されていたようである。遺跡からは、10を越える大小の平場や土塁跡、空堀跡、土橋などの遺構を、現況からも明確に観察することができ、保存状態が大変良好な遺跡である。構造としては、主郭と考えられる丘陵頂部を中心に平場を連ねる連郭式と言える。以下、これらを詳細に見ていくこととする。

主郭は丘陵頂部にある平場Ⅰと考えられ、北東部が細長く三角形に張り出す橢円形の平坦面で、規模は東西約100m、南北約150mあり、やや南に傾斜している。遺構としては縁辺部に土塁状の高まり



第2図 遺跡周辺の地形図

が見られ、西の縁辺のものは長さ約80m、高さ約2mある。なお、紫桃正隆氏の略図（1973年）によれば、主郭の南と西の縁辺に一連の土塁跡が描かれているが、近年まで桑畠など耕作地であったことから、後世の改変が加えられている可能性がある。平場を区画する施設は空堀跡・急斜面（切岸）である。東辺は急斜面によって約6.5m下の平場8と区切られ、他の部分には空堀跡が巡る。空堀跡の外側にはさらに土塁跡を伴い、北辺では二重の土塁跡・空堀跡が配置される。また、南端部と東辺張り出し部には、土橋状遺構が付く。前者は平場5との連絡路で、長さ約5mある。後者は麓から続く通路で、弧を描きながら緩やかに上り、張り出し部付近で約40mにわたり土橋状となる。主郭の8mほど手前で直角に折れ曲がり、主郭に至る。いずれも主郭への登り口として、今も利用されている。

副郭と考えられる平場2は、空堀跡をはさんで平場1から西側に一段下りたところにある。やや丸味を帯びた方形を呈する平坦面で、規模は東西約35m、南北60mで、平場1より約4m低い。北の縁辺一帯に高さ1mほどの土塁跡がある。周囲にはいくつかの空堀跡が組み合って巡る。

平場3は、平場2と北西部で接するもので、北西—南東方向の細長い長方形を呈する平坦面である。規模は長さ約70mで、幅は10~5mと部分的に広がりを持つ。平場2より約2m低く、その境は緩やかな傾斜となる。

平場4は、平場3から南側に一段下りたところにあり、長さ約45m、幅20mの不整形を呈し、平場3より約5m低い。北の縁辺は平場3との境をなす土塁跡・空堀跡で区画され、南は急斜面となる。

平場5・6・7は連続する段差状の平場である。南東に行くにしたがい4~3mの段差がつき次第に低くなっていく。平場5・6の規模は長さ40~30m、幅10~5mほどで、平場7は東西約110m、南北約50mの比較的大きな平場である。平場7の縁辺には、小規模の土塁跡が断続的に見られる。周囲は急斜面となっており、部分的に空堀跡が見られる。平場7から尾根伝いに直線的に集落に降りていったところに、「大手門」が存在したという伝承がある。

主郭の東側には、段差状に平場8・9が配置されている。平場8・9はともに東西20m、南北80mほどの広さを持ち、長方形を呈する。平場9は平場8より約8m低い。

平場9のさらに東側には、南に向かって緩やかに傾斜する平場10があり、ここは紫桃氏が指摘する直径60mほどの円形平場「東曲輪」と思われる。この平場の東の縁辺で南北方向に延びる土塁跡と空堀跡を確認している。さらに紫桃氏は、「東曲輪」の東に「馬場跡」と呼ばれる平場があることを付け加えている。

なお、本遺跡の全体像を把握するため、今回城跡周辺を踏査した結果、現地形から遺構と推定できるものも見つかっている。これらについては、「第3図 上橋城跡全体図と調査区の位置」に図示してある。

4. 文献上の上橋城跡

上橋城跡に関する記録は、『仙台領古城書上』の記載を見ると

支倉村 山一上橋城 三十八間 六十間 城主支倉紀伊。曾孫支倉源太左衛門常雅。

とあり、上橋城は山城で、68.4m×108mの規模を持ち、城主は支倉紀伊である。この人物は、『伊達



第3図 上橋城跡の全体図と調査区の位置

世臣家臣（巻十四）支倉家譜』などによって、支倉14代紀伊守常正をさすことがわかっている。
つねまさ

また、『風土記御用書出』の支倉村の項目で

本郷一^{支倉館} 竪五丁拾八間 横四丁廿間

御館主ハ最初支倉紀伊守ト申御方御住居被成其後貝田玄蕃ト申御方御住居之由申傳候處右年代相
知不申候但寛永十九年當村御検地帳ニ不相見得候ヘハ右以前之儀ト相聞得申候其後村上半左衛門
様御屋敷ニ罷成 一略一

の記載がある。

この「支倉館」については、立地が同じ「支倉村」であることや、「支倉紀伊」居城の記録があることから、「上楯城」と同一のものと思われる。規模は、『仙台領古城書上』が示す規模に対して582m×476mとかなり大きくなるが、前者は主郭と推定される平場1の規模をさし、後者は館跡が立地する丘陵全体をさしたものと考えられる。

『支倉家譜』によれば、戦国時代末期常正は天文の乱（1540年）に際し、はじめ伊達稙宗方に属したが、のち寝返って晴宗方に味方し、二本松の戦いに戦功を上げて所領を安堵され、天文14年（1545年）頃支倉村に上楯城を築いたとされる。常正是天正6年（1578年）に死去している。

また、この時期の支倉氏の活動記録として、天正4年（1576年）の伊達輝宗と相馬盛胤との間で行なわれた伊貝郡丸森での戦争に、支倉氏が近郷の砂金・小野両氏とともに参加している。同16年（1588年）の政宗の大崎攻めでは、支倉紀伊が小野雅楽之充とともに出陣している。

第二章 調査に至る経緯と調査の方法

本調査は、支倉地区の農村振興総合整備事業による「上楯城跡公園整備事業」（工事主体者：宮城県大河原地方振興事務所）計画に伴い実施されたものである。管理用道路設置のため削平される場所については発掘調査を実施し、その他遺構は損なわれないが、上楯城跡の範囲や遺構・遺物の有無など遺跡の内容をより正確に把握するため、確認調査を実施することにした。

本調査は、平成17年4月18日から開始し、約1ヶ月間実施した。調査対象範囲は21,000m²に及ぶため、管理用道路・園路・東屋などの設置予定区域に任意にトレント（合計9ヵ所、調査総面積385m²）を設定して行なった。I区とII区については、重機で表土除去および埋め戻し作業を行なったが、III区～IX区は重機の搬入が不可能であったためすべて人力で行なった。

精査した遺構の平面図は、任意グリッドを基準に縮尺1/20で作成したVII区を除いて、電子平板を用いて作成した。断面図は縮尺1/20で作図した。また、35mm白黒、6×7cm白黒・カラーリバーサルおよびデジタルカメラによる記録も併せて行なった。

また、上楯城跡の細部を把握するため館跡全体を踏査し、縮尺1/500の地形図に表現されていない土塁跡・空堀跡などの遺構を加筆する作業を行なった。

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、館跡に関わる遺構と遺物、その他縄文時代・古代の遺物が確認された。

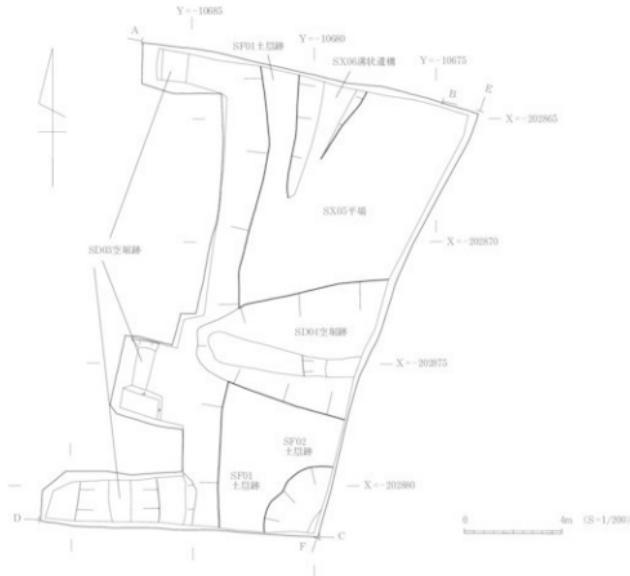
1. 発見された遺構

土壙跡、空堀跡、通路跡、門跡、土橋、溝状遺構、平場が確認された。以下、区ごとに遺構の説明を行う。

I区（調査面積約182m²）

調査区は主郭・副郭に至る緩やかな丘陵南斜面にあり、標高は232～235mである。検出遺構は土壙跡2条、空堀跡2条、溝状遺構1条である。また、調査区北東部では、整地面が認められた。

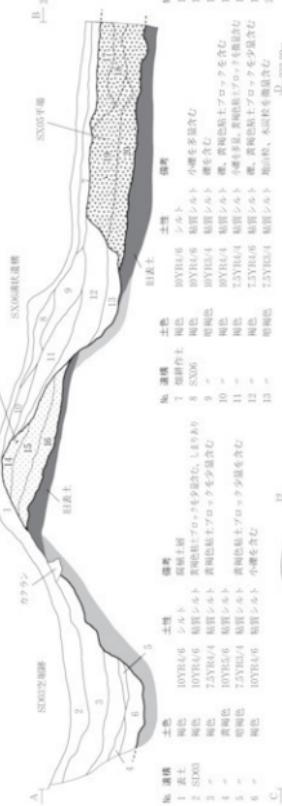
【SF01土壙跡】SD03空堀跡を伴って丘陵斜面に沿って縱走するもので、長さ約19m確認された。中央付近では高さを減じ、最終的にSX05平場と同じ高さとなって平坦となる。規模は基底部幅約3.4m、残存高約70cmある。土壙跡頂部とSD03空堀跡底面との比高は、調査区南端で約2.0m、北端で約2.4mある。調査区北端と南端の断面観察により、旧表土層上面に積土をして構築していることが確認されたが、北側においては整地した平坦面（SX05）に積土を行なっている部分もあると考えられる。積土は小礫混じりの褐色土・暗褐色土などで、東へ傾斜している。



第4図 I区 遺構平面図

SP01-1704

B-206.00m



D-222.00m

E-E'

SP01-1704

F-F'

SP02-904

G-G'

SP02-908

H-H'

SP02-910



I-I' 206.00m

J-J' 206.00m

K-K' 206.00m

L-L' 206.00m

M-M' 206.00m

N-N' 206.00m

O-O' 206.00m

P-P' 206.00m

Q-Q' 206.00m

R-R' 206.00m

S-S' 206.00m

T-T' 206.00m

U-U' 206.00m

V-V' 206.00m

W-W' 206.00m

X-X' 206.00m

Y-Y' 206.00m

Z-Z' 206.00m

AA-AA' 206.00m

BB-BB' 206.00m

CC-CC' 206.00m

DD-DD' 206.00m

EE-EE' 206.00m

FF-FF' 206.00m

GG-GG' 206.00m

HH-HH' 206.00m

II-II' 206.00m

JJ-JJ' 206.00m

KK-KK' 206.00m

LL-LL' 206.00m

MM-MM' 206.00m

NN-NN' 206.00m

OO-OO' 206.00m

PP-PP' 206.00m

QQ-QQ' 206.00m

RR-RR' 206.00m

SS-SS' 206.00m

TT-TT' 206.00m

UU-UU' 206.00m

VV-VV' 206.00m

WW-WW' 206.00m

XX-XX' 206.00m

YY-YY' 206.00m

ZZ-ZZ' 206.00m

AA-AA' 206.00m

BB-BB' 206.00m

CC-CC' 206.00m

DD-DD' 206.00m

EE-EE' 206.00m

FF-FF' 206.00m

GG-GG' 206.00m

HH-HH' 206.00m

II-II' 206.00m

JJ-JJ' 206.00m

KK-KK' 206.00m

LL-LL' 206.00m

MM-MM' 206.00m

NN-NN' 206.00m

OO-OO' 206.00m

PP-PP' 206.00m

QQ-QQ' 206.00m

RR-RR' 206.00m

SS-SS' 206.00m

TT-TT' 206.00m

UU-UU' 206.00m

VV-VV' 206.00m

WW-WW' 206.00m

XX-XX' 206.00m

YY-YY' 206.00m

ZZ-ZZ' 206.00m

AA-AA' 206.00m

BB-BB' 206.00m

CC-CC' 206.00m

DD-DD' 206.00m

EE-EE' 206.00m

FF-FF' 206.00m

GG-GG' 206.00m

HH-HH' 206.00m

II-II' 206.00m

JJ-JJ' 206.00m

KK-KK' 206.00m

LL-LL' 206.00m

MM-MM' 206.00m

NN-NN' 206.00m

OO-OO' 206.00m

PP-PP' 206.00m

QQ-QQ' 206.00m

RR-RR' 206.00m

SS-SS' 206.00m

TT-TT' 206.00m

UU-UU' 206.00m

VV-VV' 206.00m

WW-WW' 206.00m

XX-XX' 206.00m

YY-YY' 206.00m

ZZ-ZZ' 206.00m

AA-AA' 206.00m

BB-BB' 206.00m

CC-CC' 206.00m

DD-DD' 206.00m

EE-EE' 206.00m

FF-FF' 206.00m

GG-GG' 206.00m

HH-HH' 206.00m

II-II' 206.00m

JJ-JJ' 206.00m

KK-KK' 206.00m

LL-LL' 206.00m

MM-MM' 206.00m

NN-NN' 206.00m

OO-OO' 206.00m

PP-PP' 206.00m

QQ-QQ' 206.00m

RR-RR' 206.00m

SS-SS' 206.00m

TT-TT' 206.00m

UU-UU' 206.00m

VV-VV' 206.00m

WW-WW' 206.00m

XX-XX' 206.00m

YY-YY' 206.00m

ZZ-ZZ' 206.00m

AA-AA' 206.00m

BB-BB' 206.00m

CC-CC' 206.00m

DD-DD' 206.00m

EE-EE' 206.00m

FF-FF' 206.00m

GG-GG' 206.00m

HH-HH' 206.00m

II-II' 206.00m

JJ-JJ' 206.00m

KK-KK' 206.00m

LL-LL' 206.00m

MM-MM' 206.00m

NN-NN' 206.00m

OO-OO' 206.00m

PP-PP' 206.00m

QQ-QQ' 206.00m

RR-RR' 206.00m

SS-SS' 206.00m

TT-TT' 206.00m

UU-UU' 206.00m

VV-VV' 206.00m

WW-WW' 206.00m

XX-XX' 206.00m

YY-YY' 206.00m

ZZ-ZZ' 206.00m

AA-AA' 206.00m

BB-BB' 206.00m

CC-CC' 206.00m

DD-DD' 206.00m

EE-EE' 206.00m

FF-FF' 206.00m

GG-GG' 206.00m

HH-HH' 206.00m

II-II' 206.00m

JJ-JJ' 206.00m

KK-KK' 206.00m

LL-LL' 206.00m

MM-MM' 206.00m

NN-NN' 206.00m

OO-OO' 206.00m

PP-PP' 206.00m

QQ-QQ' 206.00m

RR-RR' 206.00m

SS-SS' 206.00m

TT-TT' 206.00m

UU-UU' 206.00m

VV-VV' 206.00m

WW-WW' 206.00m

XX-XX' 206.00m

YY-YY' 206.00m

ZZ-ZZ' 206.00m

AA-AA' 206.00m

BB-BB' 206.00m

CC-CC' 206.00m

DD-DD' 206.00m

EE-EE' 206.00m

FF-FF' 206.00m

GG-GG' 206.00m

HH-HH' 206.00m

II-II' 206.00m

JJ-JJ' 206.00m

KK-KK' 206.00m

LL-LL' 206.00m

MM-MM' 206.00m

NN-NN' 206.00m

OO-OO' 206.00m

PP-PP' 206.00m

QQ-QQ' 206.00m

RR-RR' 206.00m

SS-SS' 206.00m

TT-TT' 206.00m

UU-UU' 206.00m

VV-VV' 206.00m

WW-WW' 206.00m

XX-XX' 206.00m

YY-YY' 206.00m

ZZ-ZZ' 206.00m

AA-AA' 206.00m

BB-BB' 206.00m

CC-CC' 206.00m

DD-DD' 206.00m

EE-EE' 206.00m

FF-FF' 206.00m

GG-GG' 206.00m

HH-HH' 206.00m

II-II' 206.00m

JJ-JJ' 206.00m

KK-KK' 206.00m

LL-LL' 206.00m

MM-MM' 206.00m

NN-NN' 206.00m

OO-OO' 206.00m

PP-PP' 206.00m

QQ-QQ' 206.00m

RR-RR' 206.00m

SS-SS' 206.00m

TT-TT' 206.00m

UU-UU' 206.00m

VV-VV' 206.00m

WW-WW' 206.00m

XX-XX' 206.00m

YY-YY' 206.00m

ZZ-ZZ' 206.00m

AA-AA' 206.00m

BB-BB' 206.00m

CC-CC' 206.00m

DD-DD' 206.00m

EE-EE' 206.00m

FF-FF' 206.00m

GG-GG' 206.00m

HH-HH' 206.00m

II-II' 206.00m

JJ-JJ' 206.00m

KK-KK' 206.00m

LL-LL' 206.00m

MM-MM' 206.00m

NN-NN' 206.00m

OO-OO' 206.00m

PP-PP' 206.00m

QQ-QQ' 206.00m

RR-RR' 206.00m

SS-SS' 206.00m

TT-TT' 206.00m

UU-UU' 206.00m

VV-VV' 206.00m

WW-WW' 206.00m

XX-XX' 206.00m

YY-YY' 206.00m

ZZ-ZZ' 206.00m

AA-AA' 206.00m

BB-BB' 206.00m

CC-CC' 206.00m

DD-DD' 206.00m

EE-EE' 206.00m

FF-FF' 206.00m

GG-GG' 206.00m

HH-HH' 206.00m

II-II' 206.00m

JJ-JJ' 206.00m

KK-KK' 206.00m

LL-LL' 206.00m

MM-MM' 206.00m

NN-NN' 206.00m

OO-OO' 206.00m

PP-PP' 206.00m

QQ-QQ' 206.00m

RR-RR' 206.00m

SS-SS' 206.00m

TT-TT' 206.00m

UU-UU' 206.00m

VV-VV' 206.00m

WW-WW' 206.00m

XX-XX' 206.00m

YY-YY' 206.00m

ZZ-ZZ' 206.00m

AA-AA' 206.00m

BB-BB' 206.00m

CC-CC' 206.00m

現況では、調査区より副郭にかけてSF01土壙跡の延びと思われる土壙状の高まりが直線的に続いており、これは副郭の西周辺に巡る土壙跡と直角に連結する。また、南側の延びは現況観察では見つからないが、調査区南端の断面観察により、SD03空堀跡とともに調査区外に延びていくものと考えられる。

【SF02土壙跡】調査区南東部にあり、SF01土壙跡とT字状に連結するもので、長さ約3m確認された。その規模は、基底部幅約4.0m、残存高約50cmある。土壙跡頂部とSD04空堀跡底面との比高は、約1.0mある。断面観察の結果、旧表土層上面に積土をして構築していることが確認された。積土は、旧表土由来の黒色土ブロックを含む褐色土、白色粘土ブロックを含む黄褐色土などから成る。

現況では、調査区東側においてSF02土壙跡の延びと思われる小規模な高まりを観察することができ、この延びは断続的に平場7南斜面裾部まで続いている。

【SD03空堀跡】調査区西半部にあり、SF01土壙跡を伴い丘陵斜面に沿って縱走するもので、長さ約20m確認された。上幅は調査区外に及ぶため不明であるが、確認できる範囲で6.0～3.5m、下幅約1.2mある。南に行くにしたがって徐々に幅が広がり、深さも増す傾向にある。底面はほぼ平坦で、壁はやや角度をもって立ち上がる。両壁の中途に軽い段が付く。また、底面の一部に約50～40cmほどの段差が確認され、南側が一段深くなる。堆積土は約1.8～1.6mの厚さで認められ、上層は黄褐色土ブロックを含む暗褐色土・褐色土などから成り、下層は砂混じりの水成堆積の状況を呈する。

現況では、SF01土壙跡を伴って副郭へ続く空堀跡を観察することができる。これは副郭付近で西へ折れ曲がり、両脇に土壙跡を伴ってさらに副郭西辺を巡っている。

【SD04空堀跡】調査区中央から東側にあり、SD03空堀跡とT字状に連結するもので、長さ約7m確認された。上幅約4.7m、下幅約1.0mあり、SX05平場上面と空堀跡底面の比高は約3.0mである。平面はほぼ平坦で、壁はやや角度をもって立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。また、底面の一部に70～60cmほどの段差が確認され、東側が一段深くなる。約1.2mの厚さで堆積土が認められ、黄褐色土ブロックや小礫を含む暗褐色土・褐色土などの自然堆積層である。

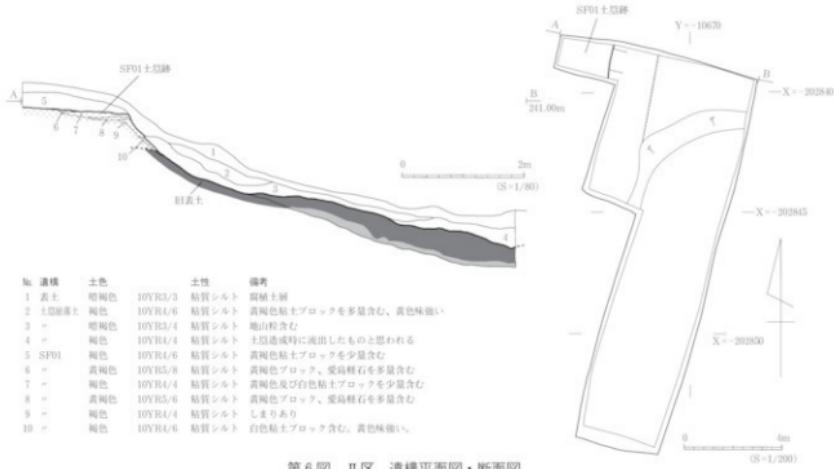
現況では、調査区より東方にかけてSD04空堀跡の延びと思われる若干の窪みを観察することができる。

【SX05平場】調査区北東部において、約35m²の整地面が確認された。整地は、南側に向かって傾斜する沢部分の旧表土上面に、白色粘土ブロックを含む暗褐色土・褐色土などを3～4層積み上げて、平坦面を構築している。厚さは調査区北端で約70cm、SD04空堀跡の北壁で観察すると、約1.5mある。なお、柱穴などの遺構は検出されていない。

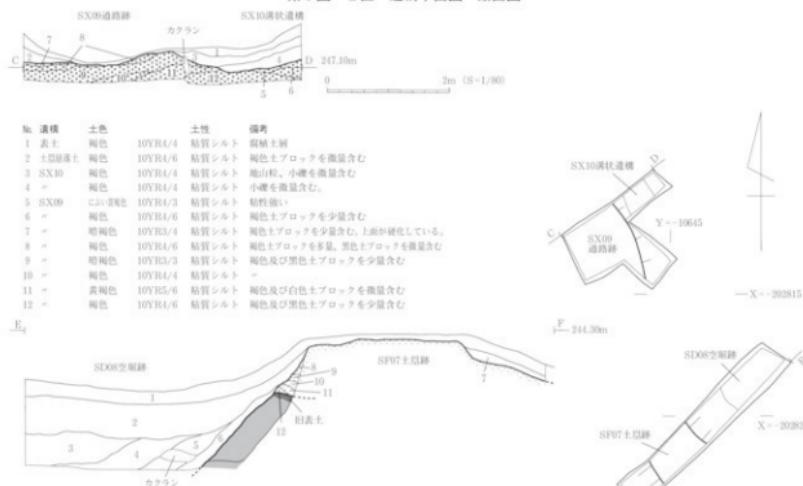
【SX06溝状遺構】調査区北端にあり、SF01土壙跡のすぐ東を並行して南北方向に延びるもので、長さ約3m確認された。幅約2.2m、深さ約60cmの小規模なもので、南に行くにしたがい浅くなり、次第に平坦となる。堆積土は、最下層の自然堆積土を除き、黄褐色土ブロックや径10～20cmの礫を比較的多く含んだ暗褐色土・褐色土などであり、SF01土壙跡の崩落土と考えられる。

II区（調査面積約82.0m²）

調査区は1区から北へ約7m離れた丘陵南斜面にあり、標高236～241mである。検出遺構は土壙跡



第6図 II区 遺構平面図・断面図



第7図 III区 遺構平面図・断面図

1条である。この土塁跡の東側は削平を受けており、後世の畠地と考えられる。

【SF01土塁跡】調査区西端にあり、長さ約1.5m確認された。I区で検出された土塁跡と一連のものである。断面観察の結果、旧表土層上面に積土をして構築していることが確認された。積土は、愛島軽石（註1）を多量に含む褐色土・黄褐色土などから成る。基底部幅は不明で、残存高は約60cmある。土塁跡の東側では、崩落土および土塁造成時に流出したと思われる土が確認された。なお、I区で確認されたSX06溝状遺構は検出されなかった。

III区（調査面積約23.8m²）

調査区はII区から北へ約30m離れた丘陵南斜面にあり、標高243～247mである。検出遺構は土塁跡1条、空堀跡1条、通路跡1ヶ所、溝状遺構1条である。

【SF07土塁跡】調査区南側にあり、SD08空堀跡を伴って北西－南東方向に延びるものである。基底部幅は不明で、残存高は90cmある。SD08空堀跡底面は検出されていないが、確認できる範囲での比高は約2.1mある。断面観察の結果、旧表土層上面に積土をして構築していることが確認された。積土は、愛島軽石を含む褐色土などから成る。また、土塁跡の左右で崩落土が確認された。幅約2.4mの土塁跡頂部は平坦で、やや硬く縮まっていることから、通路として利用されていた可能性が考えられる。

現況では、調査区から平場4にかけてSF07土塁跡の延びと思われる高まりを観察することができる。反対の副郭側では高さを減じながら平坦となり、SX09通路跡につながっていくものと考えられる。

【SD08空堀跡】調査区南側にあり、SF07土塁跡を伴って北西－南東方向に延びるものである。空堀跡の東半部は調査区外に及んでいるが、上幅で約4.6m確認され、底部も不明ながら深さ1.4mまで確認することができた。西壁はやや角度をもって立ち上がる。堆積土は約1.3mの厚さがあり、暗褐色土・褐色土などの自然堆積層である。

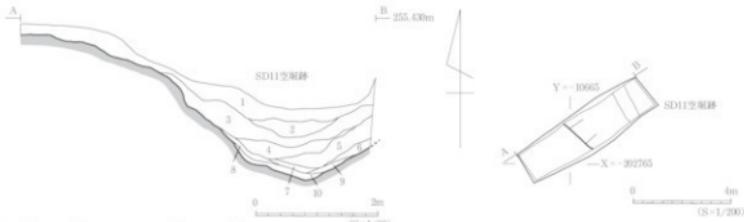
現況では、調査区から平場7にかけてSF07土塁跡を伴って延びる空堀跡を観察することができる。反対の副郭側では、若干の窪みが見られるのみである。

【SX09通路跡】調査区北側において長さ3.5m、幅2.0mの範囲で、副郭に向けて緩やかに上っていく平坦面が確認された。通路面は、西側の土塁跡状の高まりと、上段の平場3の西斜面にはさまれたところにある。盛土整地を施しており、積土は黒色土ブロックを含む褐色土・暗褐色土から成る。上面はほぼ平坦で、東側で20cmほど高まり、SX10溝状遺構に続く。地山面まで掘り下げていないため、厚さは不明である。

SX09通路跡が検出された場所は現在でも通路として利用されているところで、調査区より副郭にかけて緩やかな斜面が続き、副郭南斜面手前で東に折れ、副郭斜面と平場3斜面にはさまれながら副郭の南東隅に至る。

【SX10溝状遺構】調査区北側にあり、SX09通路跡に沿って北西－南東方向に延びるものと思われる。調査区の制限から全容は不明であるが、確認できる範囲での上幅は2.1m、深さ30cm、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は褐色土で、東側の平場3からの崩落土と考えられる。

現況では、SX10溝状遺構の延びを確認することはできなかった。



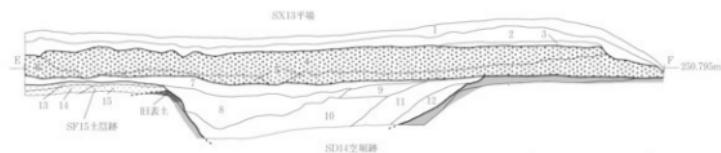
No.	遺構	土色	土性	備考
1	表土	黒褐色	7.5YR3/2 シルト	腐植土層
2	SD11	灰褐色	7.5YR4/2 粘質シルト	木炭粒、堆土ブロックを多量含む
3	“	褐色	7.5YR4/4 粘質シルト	地土ブロックを少量含む
4	“	褐色	7.5YR4/3 粘質シルト	青褐色土ブロックを少量含む
5	“	褐色	7.5YR3/2 粘質シルト	木炭粒を多量、櫻を含む
6	“	褐色	10YR4/6 粘質シルト	木炭粒を多量、櫻を含む
7	“	黒褐色	7.5YR3/2 粘質シルト	羽毛土ブロックを含む。縫隙部の底面と思われる
8	“	黒褐色	7.5YR3/2 粘質シルト	愛鳥様石を多量含む
9	“	黒褐色	7.5YR3/2 粘質シルト	—
10	“	褐色	7.5YR4/4 粘質シルト	青褐色土ブロックを含む

第8図 IV区 遺構平面図・断面図



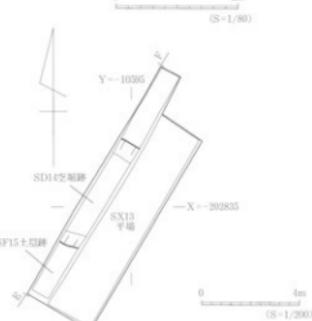
No.	遺構	土色	土性	備考
1	表土	褐色	10YR4/6 シルト	腐植土層
2	SF12	褐色	10YR4/6 シルト	青褐色土ブロックを含む。黄色味強い。
3	“	青褐色	10YR5/6 粘質シルト	白色粘土ブロックを多量、小塊を微量含む
4	“	明褐色	10YR6/6 粘質シルト	愛鳥様石を多量含む。
5	“	明褐色	10YR6/4 シルト質粘土	青褐色土ブロックを多量含む

第9図 V区 遺構平面図・断面図



No.	遺構	土色	土性	備考
1	表土	褐色	10YR3/2 シルト	
2	“	褐色	10YR4/4 シルト	
3	“	褐色	10YR4/6 シルト	
4	SX13	明褐色	10YR6/8 シルト	愛鳥様石、小塊を大量含む
5	“	青褐色	10YR5/6 砂質シルト	砂ブロックを多量含む
6	“	褐色	10YR4/4 シルト	—
7	SD14	褐色	10YR4/6 シルト	砂ブロックを少量含む
8	“	褐色	10YR4/6 シルト	—
9	“	褐色	10YR4/4 シルト	青褐色土ブロックを含む
10	“	褐色	10YR4/4 シルト	青褐色及く黒色土ブロックを含む
11	“	褐色	10YR4/4 シルト	—
12	“	褐色	10YR4/4 シルト	青褐色土ブロックを多量含む
13	SF15	明褐色	10YR6/8 シルト質砂	砂ブロックを多量含む
14	“	明褐色	10YR3/4 シルト	愛鳥様石。旧土石ブロックを大量含む
15	“	褐色	10YR4/6 シルト質砂	旧土石ブロックを含む

第10図 VI区 遺構平面図・断面図



IV区（調査面積約9.0m²）

調査区は、主郭と副郭にはさまれた空堀跡部分にある。標高は約252mである。検出遺構は空堀跡1条である。

【SD11空堀跡】主郭と副郭の間に掘られた空堀跡である。上幅約4.4mあり、断面形はやや開き気味のU字形を呈する。副郭面と空堀跡底面の比高は約2.6m、主郭面との比高は7.3mある。内部に約1.4mの厚さで堆積土が認められた。これらは褐色土・黒褐色土などの自然堆積層であり、下層の愛島軽石を多量に含む黒褐色土は、城機能時の堆積と考えられる。

現況では、SD11空堀跡は調査区から北へ約20m続き、その地点で二股に分かれ、土壙跡を伴って主郭、副郭それぞれに巡っている。調査区南側においても主郭斜面裾部を巡っており、平場5の土橋付近まで続く。

V区（調査面積約5.0m²）

調査区は、平場3の中央部にある。標高は約252m前後である。検出遺構は、土壙跡1条である。

【SF12土壙跡】調査区全域で、土壙跡積土の広がりが確認された。頂部はほぼ平坦で、確認できる範囲で上幅約3.8mある。地山面まで掘り下げていないため、厚さは不明である。積土は、黄褐色土ブロックを含む黄褐色土、愛島軽石を含む明黄褐色土などから成る。

VI区（調査面積約30.0m²）

調査区は平場3の南東部で、V区から約25m離れた地点にある。標高は251m前後である。検出遺構は、土壙跡1条、空堀跡1条である。また、調査区全域で整地土が認められた。

【SX13平場】調査区全域にわたり、整地面が確認された。頂部はほぼ平坦で、確認できる範囲で上幅約2.3m、厚さは50cm前後ある。整地は、SD15空堀跡埋土および地山面に、砂ブロックを含む褐色土・黄褐色土を積み上げて、平坦面を構築している。なお、柱穴などの遺構は検出されていない。整地土から、石臼が出土した。

【SD14空堀跡】SX13平場の整地土下で確認されたものである。北西-南東方向に延びるものと思われる。上幅約5mあり、底面まで掘り下げていないが深さ1mまで確認できた。壁は、東側が緩やかであるのに対し、西側はやや角度をもって立ち上がる。堆積土は、黒色土ブロックや黄褐色ブロックを含む褐色土などで、人為的埋め戻しと思われる。

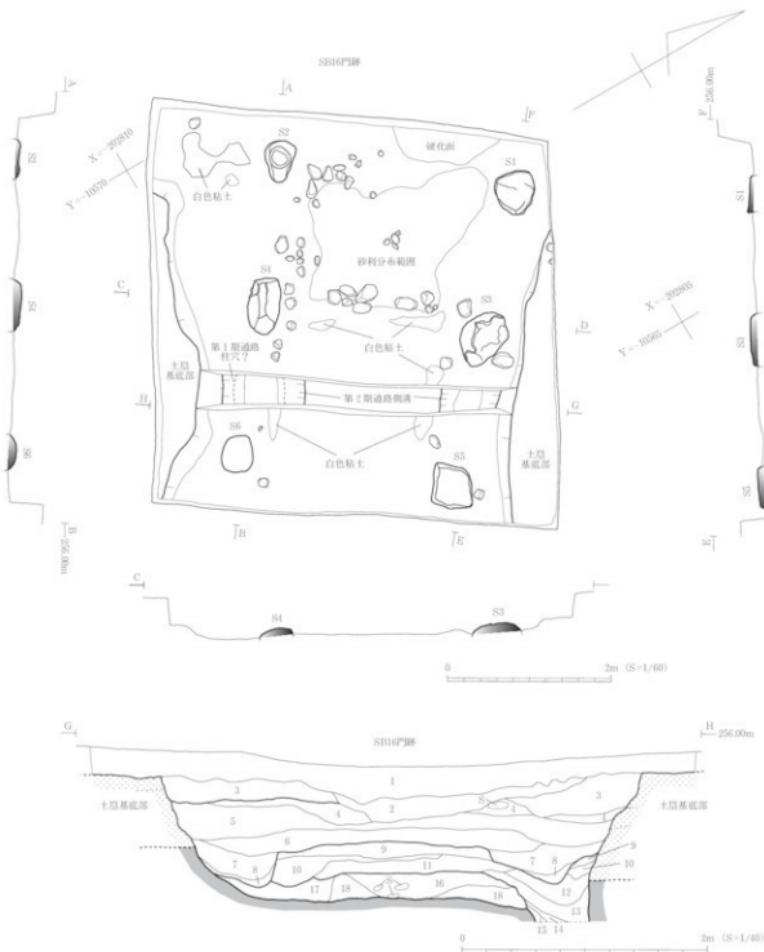
【SF15土壙跡】SX13平場の整地土下で、積土の一部が確認された。SD14空堀跡を伴って北西-南東方向に延びるものと思われる。旧表土層上面に積土をして構築している。確認できる範囲で上幅約2.3mあり、地山面まで掘り下げていないため、厚さは不明である。積土は、暗褐色土・黄褐色土などを2~3層積み上げている。

VII区（調査面積約15.8m²）

調査区は、主郭の中央西寄りにある。表土面下約30cmで黄褐色土の地山面に達した。遺構は検出されなかった。

VIII区（調査面積約25.0m²）

調査区は、主郭の南端部にある。検出遺構は、門跡（通路跡）1ヶ所である。調査区のすぐ南に



No.	構造	土色	生垣	傷害	No.	構造	土色	生垣	傷害
1	上式	暗褐色	10YR5/4	輪葉シント	11		褐色	BYR4/6	輪葉シント 黒化及び褐色土ブロックを含む
2	上式	褐色	10YR4/4	輪葉シント	12	柱穴式	黑褐色	2.5YR4/2	輪葉シント 黒化並びに褐色土ブロックを含む。
3	上式	暗褐色	10YR3/3	輪葉シント	13	上式	暗褐色	BYR3/2	輪葉シント 黒化並びに褐色土ブロックを含む。
4	通路式 3列	暗褐色	7.5YR3/2	輪葉シント	14	上式	褐色	BYR4/6	輪葉シント 黒化並びに褐色土ブロックを含む。
5	上式	暗褐色	7.5YR3/2	輪葉シント	15	上式	暗褐色	BYR4/2	輪葉シント 1列に集中
6	上式	褐色	7.5YR4/6	輪葉シント	16	通路式 1列	褐色	BYR4/4	輪葉シント 上部が硬化している。硬を含む
7	通路式 2列	暗褐色	10YR3/4	輪葉シント	17	上式	暗褐色	BYR3/4	輪葉シント 白色土ブロックを含む。
8	上式	暗褐色	10YR3/4	輪葉シント	18	上式	褐色	BYR4/6	輪葉シント 褐色土ブロックを含む。
9	通路式 2列	褐色	7.5YR4/4	輪葉シント					
10	上式	褐色	10YR4/6	輪葉シント					

第11図 VII区 造構平面図・断面図

は、平場5との連絡路となる土橋状遺構がある。

【SB16門跡】東西2間×南北1間の建物跡で、正面1間の親柱（本柱）の前後に2本ずつ計4本の控柱からなる四脚門と考えられる。礎石6個が検出された。礎石は径70~50cmで、形状は楕円形および方形状を呈する。そのうち4個の礎石（S1・2・3・4）には、表面の一部に加工痕が認められた。親柱間（S2-S5）は2.8m、控柱間はS1-S2で約2.9m、S5-S6で約2.7mである。また、控柱の梁行はS1-S5で3.7m、S2-S6で3.7mある。

門跡の両脇には、土塙跡基底部と思われる積土が認められた。積土は地山上面に積まれており、褐色土・暗褐色土などから成る。頂部はほぼ平坦で上幅約3.6m、残存高約90~70cmある。

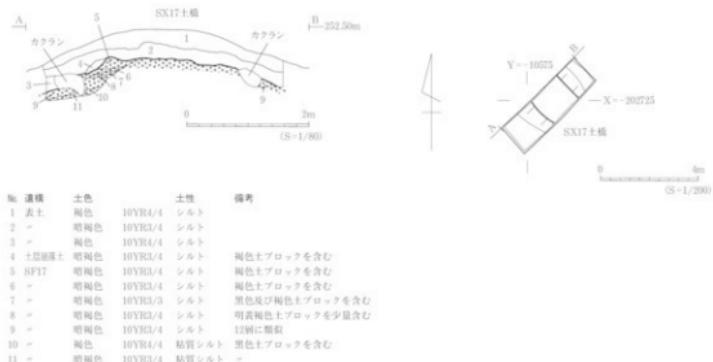
通路部分は整地を行い、平坦面を構築している。部分的な断ち割りを行なった結果、同じ場所において少なくとも3時期の変遷があることが認められた。改築に際し前段階の通路面に盛土を施しておき、路面は改築に伴って次第に高くなる。第1期と第3期の路面の比高は約70cmある。

以下、古い時期から順に説明をおこなう。

第1期 地山上面に、灰色味が強い褐色土などを約20cm積み上げている。路面幅は約1.7mある。上面はほぼ平坦で、固く締まっている。西端に柱穴と思われるものが確認された。

第2期 1期通路上面に、黒色土を含む褐色土などを約20cm積み上げている。上面はほぼ平坦で、固く締まっている。路面幅は約1.7mある。右左に側溝が確認された。側溝の規模は、上幅90~70cm、深さ約30cmある。堆積土は暗褐色土で、上層は人為的埋め戻しで、下層はほぼ均質な自然堆積で、通路機能時のものと思われる。側溝堆積土より、鉄製品小柄が出土した。

第3期 2期通路上面に、白色土ブロックや黒色土を含む暗褐色土・褐色土などを約50~20cm積み上げている。上面はほぼ平坦で、調査区中央部から南側でやや窪んでいる。調査区北端で硬化面が確認された。礎石を結ぶ直線上に径5~30cmの礎や白色粘土がまとまって検出しており、その内側では砂利が検出されている。



第12図 IX区 遺構平面図・断面図

IX区（調査面積約9.0m²）

調査区は主郭北東部の張り出しに取り付く土橋部分で、主郭から南へ約8m離れた屈曲部分である。

【SX17土橋】

調査区全域で、積土の広がりが確認された。上幅約2.1mあり、中央部がやや盛り上がり、固く締まっている。地山面まで掘り下げていないため、厚さは不明である。積土は、黄褐色土ブロックを含む黄褐色土や島亜鉛石を含む明黄褐色土などから成る。

2. 発見された遺物

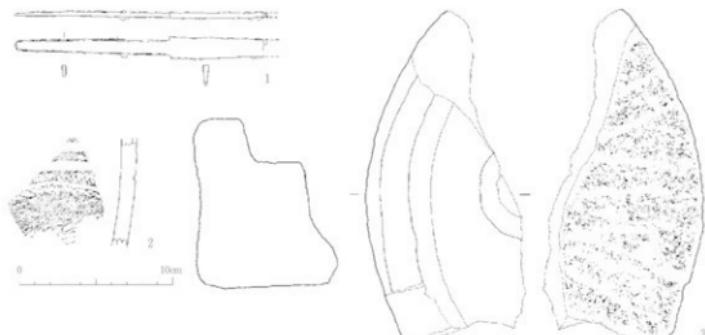
今回の調査で出土した遺物の中で、館跡に関わるものとしては小柄1点、石臼1点であり、他に古代の土師器小破片、縄文時代の土器片と剥片石器が出土した。

石製品（第13図3）

石臼の上臼で、石材は安山岩である。高さ11.1cm、受け皿部の深さは2.7cmある。供給口は下方で窄まるか、中心に寄りながら貫通していたものと思われる。下面には目が刻まれている。VI区SX13平場の整地土から出土した。

鉄製品（第13図1）

小柄と思われる。刀身部が欠損し、茎部はほぼ遺存している。残存長16.4cmある。刀身部は長さ6.2cm、身幅は最大で1.4cm、背幅は約0.4cmある。平面形は先端部に向かってわずかに細くなっており、断面形は三角形を呈する。茎部は長さ10.2cm、幅0.9~0.6cmで、端部に向かって次第に細くなっている。VII区通路跡第2期側溝堆積土から出土した。



No.	種別	出土地点	説明
1	小柄	Ⅶ区通路跡第2期側溝堆積土	鉄製 残存長16.4cm 刀身部長6.2cm 身幅1.4cm 背幅0.4cm 茎部長10.2cm 幅0.9~0.6cm
2	縄文土器	Ⅴ区SX130号施設堆積土	削片 瓢の底の尖った棒状工具によるV字の連続押引文、横拉沈面文に白う羽状刺突文
3	石臼	VI区SX13平場整地土	1臼 石臼 高さ11.1cm 受け皿部深さ2.7cm

第13図 出土遺物

土師器

ロクロ調整の土師器坏の口縁部小破片である。II区表土から出土した。

绳文土器（第13図2）

先端の尖った棒状工具による△状の連續押引き文や、横位沈線文に沿って羽状に配される刺突文が施されている。これらの特徴は明神裏Ⅲ式期のもので、绳文時代早期中頃に属するものである。III区SD08空堀跡堆積土から出土した。

剥片石器

剥片を素材とした不定形石器である。石材は頁岩である。両側縁に連続的な二次加工を施し、表面左側縁にはノッチ状の抉りを作り出している。IX区表土から出土した。

註1 愛島絆石崩 約9～10万年前に安達火山から噴出した黄色絆石（町田・新井 2003）。IV区SD11空堀跡西壁の観察では、厚さが1.9m以上ある。

第IV章 考 察

確認された遺構は、土塁跡5条、空堀跡5条、平場2ヶ所、門跡1ヶ所、土橋1ヶ所、通路跡1ヶ所、溝状遺構2条である。限定された範囲の調査であるが、以下、今回の調査で確認された各遺構の特徴および館跡について若干の検討を行なう。

(i) 各遺構について

平場

I区SX05平場は、東側をSF01土塁跡、南側をSD04空堀跡によって区画されている、現況で約20m²の平坦面である。沢の斜面に盛土整地を行なったもので、厚さ0.7～1.5mある。IV区SX13平場は、空堀跡をはさんで主郭の南側に位置する。SF15土塁跡を切り崩し、SD14空堀跡を埋め戻した後に、盛土整地によって造成されており、厚さ約50cmある。V区で、この平場の広がりが確認されなかつたことから、限られた範囲での造成と考えられる。今回の調査では、両平場とも柱穴などの遺構は検出されていない。

土塁跡・空堀跡

土塁跡はI・II区で2条(SF01・02)、III区で1条(SF07)、V区で1条(SF12)、VI区で1条(SF15)検出された。規模は基底幅3.4～4.4mあり、そのなかで基底幅4m前後のものが多く、III区SF07土塁跡が最大である。検出された土塁跡は、いずれも空堀跡を伴い、両者は一对となって延びている。積土は概ね旧表土層上面に構築され、その積み方を見るとSF01土塁跡のI区北壁断面で斜めに積み上げていった状況が確認できたが、その他はほぼ平行に積み上げている。検出された土塁跡の中でSF07土塁跡については、頂部の平坦面が固く縮まっていたことやSX09通路跡との位置関係より連續性が認められることから、通路として利用されていた可能性が考えられる。

空堀跡はI区で2条(SD03・04)、III区で1条(SD08)、IV区で1条(SD11)、VI区で1条(SD14)検出された。規模は上幅3.2～6.0m、深さ1.3～2.1mあり、規模の大きなものとしては南方で徐々に

広がりを見せていたI区SD03空堀跡や、主郭と副郭にはさまれたIV区SD11空堀跡がある。検出された空堀跡は、いずれも土塁跡を伴い、両者は一対となって伸びている。断面形を見ると、SD03・04空堀跡は逆台形の箱堀状を呈し、SD11空堀跡はやや開き気味のU字状を呈する。形態としては、SD03空堀跡は丘陵斜面に沿って上下に掘られた豊堀、SD08空堀跡・SD11空堀跡は平場を囲むように掘られた横堀と捉えることができる。SD03空堀跡とSD04空堀跡の堀底には段掘りが見られ、これは空堀跡が持つ防護的機能をより高めるためのものと考えられる。

なおVI区では、SX13平場の構築に際し、SF15土塁跡は削平され、SD14空堀跡は同時に埋め戻されているものと考えられる。

門跡

VII区で検出されたSB16門跡は主郭南端部に位置し、主郭と下段の平場5を繋ぐ土橋状遺構を登り切った地点で検出された。礎石が6個検出され、礎石の配列状況から正面1間の親柱（本柱）の前後に2本ずつ計4本の控柱からなる四脚門と考えられる。礎石を結ぶ直線上に径5~30cmの礎や白色粘土、その内側では砂利の広がりが確認されたが、これらは礎石を据え置く際の地盤固めに用いられた、あるいは通路面の舗装として敷き詰められたものであろう。

なお、通路部分にトレンチを入れたところ、厚さ約80cmの整地土があり、整地土の中位で旧路面と思われる硬化面が2面、また柱穴や側溝と見られる遺構が確認されたことから、少なくとも3時期の変遷があるものと考えられる。

土橋

IX区SX17土橋は、主郭北東部の張り出し南斜面に取り付くもので、主郭手前でL字状に屈曲する。部分的な調査であったが全体が積土されており、頂部が硬化していることから、北東側から主郭へ至る土橋であったと考えられる。

なお、主郭南端部に取り付く土橋状遺構について今回調査はしていないが、VII区でSB16門跡が検出されたことから、SX17土橋と同様に主郭に至る土橋であると考えられる。

通路跡

III区SX09通路跡は、副郭のすぐ南の、土塁状の高まりと上段の平場斜面にはさまれたところで検出された。形状はほぼ直線的に延び、副郭手前で東に折れ曲がる。盛土整地が施されている。旧路面と思われる硬化面が認められたことから、副郭に至る通路であったと考えられる。

溝状遺構

I区SX06溝状遺構は斜面に沿って伸びており、下方に向かって徐々に浅くなるもので、西側にSF01土塁跡、東側にSX05平場がある。III区SX10溝状遺構は斜面に沿って伸びるもので、東側にSX09通路跡がある。検出された位置から考えて、これらは平場や通路への雨水などの流れ込みを防ぐために造られた排水施設と考えられる。

今回の調査では、小柄や石臼などの遺物が出土したのみで、遺構の年代を裏付けるものは出土していない。したがって、これらの遺構についてその年代を限定することはできない。

(2) 館跡について

今回の調査結果を見ると、Ⅱ区のように畑作などによって削平を受けていたところもあったが、後世の著しい改変は認められなかった。また、現地形からも明確に土塁跡・空堀跡などの遺構を観察できることから、旧状を非常によく留めた館跡であると言える。

館跡周辺を踏査した結果、既成図で表現されていない副郭から北西方向に直線的に延びる土塁跡・空堀跡や、主郭から約500m東方でも土塁跡・空堀跡などの遺構が見つかっている。よって、第3図で示したもの以外にも遺構の存在が考えられ、館跡の規模についてもさらに広がる可能性がある。

館跡の築城年代や存続年代について、前述したように今回の調査結果からは明らかにすることはできなかった。しかし、文献上では館跡の築城年代について、『支倉家譜』で天文14年（1545年）頃とされていることから、少なくとも16世紀後半には城が存在したものと推定される。また、『風土記御用書出』によれば、寛永19年（1642年）後に「村上半左衛門様御屋敷」として利用されたとの記載があり、近世には屋敷地として機能していたものと推定される。

第V章　まとめ

今回の調査成果を要約すると、次のようになる。

1. 上楯城跡は、川崎町支倉地区における丘陵頂部および斜面を利用して築かれた山城である。大小の平場が配され、それを取り巻く空堀跡や土塁跡などの遺構が、現地形からも明確に確認することができる良好に保存された館跡である。
2. 今回の調査は「上楯城跡公園整備事業」計画に伴うもので、限られた区域の調査であり、内部の実態は不明であるが、土塁跡・空堀跡・門跡・通路跡・溝状遺構・平場・土橋状遺構が確認された。
3. 今回の調査では、明確に年代を知り得る遺物は出土しなかったことから、上楯城跡の時期を限定することはできなかった。『支倉家譜』によると、上楯城跡の築城年代を天文14年（1545年）頃としていることから、少なくとも16世紀後半には城が存在したものと推定される。
4. Ⅲ区SF07土塁跡が通路として利用されていたことや、VI区SX13平場、VII区SB16門跡については、文献で見られる屋敷機能時のものである可能性も考えられる。
5. 縄文時代の土器片や石器、また古代の土師器片なども発見された。

参考・引用文献

- 齊藤 吉弘（1983）：「八谷館跡・御所館跡・駒場館跡」『東北自動車道跡調査報告書肆』宮城県文化財調査報告書第93集
- 藤沼 邦彦ほか（1981）：『日本城郭体系 3 山形・宮城・福島』
- 紫桃 正隆（1973）：『史料 仙台城内古城館』第四卷
- 川崎町史編纂委員会（1975）：『川崎町史通史編・史料編』
- 川崎町教育委員会（1999）：「川崎町の文化財第10集 地名考」
- 青森県史編纂考古部会（2003）：『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』
- 町田 洋・新井房夫（2003）：『新編火山灰アトラス【日本列島とその周辺】』東京大学出版会
- 支倉常長顕会（1975）：『支倉常長伝』

写 真 図 版



上橋城跡遠景（南から）



I区 発掘前の状況（南から）



I区 遺構検出状況（南から）



I区 北壁断面（南から）



I区 SD03空堀跡（北から）



I区 SD04空堀跡（西から）



II区 遺構検出状況（南から）



III区 SF07土塁跡・SD08空堀跡（北から）

写真図版 1



III区 SX09通路跡（南から）



IV区 SD11空堀跡（南から）



V・VI区 発掘前の状況（北から）



V区 遺構検出状況（南から）



VI区 遺構検出状況（東から）



VII区 全 景（南から）



主郭南端部の土橋状遺構（東から）



VIII区 磚石式門跡（北西から）



VII区 確石式門跡（南から）



IX区 SX17土橋（北から）



1. 第13図-1 2. 第13図-2 3. 剥片石器 4. 土師器 5. 第13図-3

報 告 書 抄 錄

ふりがな	かみたてじょうあと						
書名	上橋城跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第207集						
編著者名	佐藤貴志						
編集機関	宮城県教育委員会						
所在地	〒980-8570 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8-1 TEL 022-211-3682						
発行年月日	西暦 2006年3月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 遺跡番号					
かみたてじょうあと 上橋城跡	みやぎけんしばたてくみかわさき 宮城県柴田郡川崎 ちょうはせぐみあわだてやま 町 支倉字館山	043249 09058	38度 10分 25秒	140度 42分 43秒	2005.04.18 ~2005.05.27	385m ²	上橋城跡公園整備計画 に伴う確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上橋城跡	館跡	中世	土壘跡5条、空堀跡5条、平場2ヶ所、門跡1ヶ所、土橋1ヶ所、通路跡1ヶ所、溝状遺構2条	小柄 石臼 土師器 繩文土器・石器など			